

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02675

研究課題名(和文) 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究

研究課題名(英文) A study of the accent of compound/derived nouns in the Korean dialects

研究代表者

伊藤 智ゆき (Ito, Chiyuki)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：20361735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代朝鮮語方言(慶尚道方言・延辺朝鮮語)と中期朝鮮語(15-16世紀)の複合語・派生語名詞アクセントについて分析を行った。現代朝鮮語方言の複合語には大まかなアクセント付与規則があるが、構成要素である単純語のアクセント変化と相関性のある例外が見られる。中期朝鮮語の複合語では、特定の基底アクセントの組み合わせの場合にアクセント交替が生じ得たが、16世紀にその規則性が曖昧になり、延辺朝鮮語に見られる複合語アクセントパターンが生じた。慶尚道方言では左方アクセントシフトにより同様の変化が妨げられた。また、最適性理論に基づく分析により、延辺朝鮮語の複合語アクセント分布をかなり正確に予測した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代朝鮮語諸方言の複合語・派生語アクセントについては、これまで大まかなアクセント体系・アクセント付与規則等が報告されているものの、例外パターンの傾向等、詳細な性質については明らかにされていない。本研究では慶尚道方言・延辺朝鮮語及び中期朝鮮語の複合語・派生語アクセントについて新たな資料を提示するとともに、各方言における歴史的発展と、方言間に差異が見られる背景について明らかにできた点に、学術的意義がある。また、延辺朝鮮語複合語アクセントについて最適性理論に基づく分析を行い、かなり正確にそのアクセント分布を推測できたことも、より一般的に生成音韻論研究に寄与する点で、有意義だと言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated the accent patterns of compound/derived nouns in two contemporary Korean dialects (Kyongsang and Yanbian Korean) and Middle Korean (15-16th century). There are some exceptional patterns to the general accent formation rules of compound nouns in contemporary dialects, which are correlated to the accent changes of simplex nouns that compose them. Compound nouns in Middle Korean appeared with the underlying accents of the constituents as a rule, but accent deletion in the first element was occasionally observed in certain combinations of underlying accents. This tendency became ambiguous in the 16th century, which led to the apparently less regular accent distributions in Yanbian compounds. In Kyongsang, similar changes did not occur due to leftward accent shift. I conducted a weighted constraints analysis of Yanbian compounds based on the Optimality Theory framework, which predicted the observed accent distributions highly accurately.

研究分野：音韻論、歴史言語学

キーワード：韓国朝鮮語 アクセント 類推変化 複合語 中期朝鮮語 最適性理論

1. 研究開始当初の背景

筆者が本研究申請時までに行ってきた研究は、主として朝鮮語音韻論に関するものである。たとえば、朝鮮語の音素配列・共起制限に関する研究 (Ito 2014a, 2007)、借用語研究 (Ito 2014b, Ito & Kenstowicz 2014, 2009a, b 等)、朝鮮語祖語音韻体系再建に関する研究 (Ito 2013)、朝鮮語舌頂音末子音の歴史変化に関する研究 (伊藤 2014, Ito 2010)、15-16 世紀中期朝鮮語アクセント・イントネーション研究 (伊藤 2004, 2002; 約 6,800 語の見出し語からなる中期朝鮮語アクセント辞典作成済)、朝鮮漢字音研究 (伊藤 2007: 2008 年第 36 回金田一京助博士記念賞受賞) などがあ

る。また、2014-2016 年度基盤研究 (C)、2012-2013 年度若手研究 (B) 等により、とりわけ慶尚道方言 (韓国南東部)・延辺朝鮮語 (中国吉林省)・全羅道方言 (韓国南西部) を対象に、アクセント研究を進め、70 名以上の話者を対象に発話の録音を行い、また 50 名弱の話者を対象に、約 30,000 語 (異なり語数) のアクセント調査を実施した。これら収集データに基づき、各方言・語彙クラス (単純名詞、動詞/形容詞) におけるアクセントの歴史的発展や、借用語アクセント、各アクセントクラスにおける喉頭素性の影響とその音声学的実現等について、音韻論的・音響音声学的研究を行ってきた (Ito 2016, Ito 2014b, c, Do et al 2014a, b 他)。

このように筆者は、本研究申請時まで朝鮮語諸方言のアクセントについて様々な研究を行ってきたが、それらは原則としてすべて単純語を対象としている。ただし、複合語・派生語のアクセント研究は、単純語に関する十分な調査・分析結果をベースラインとして行っていく必要があると考えられるため、本研究で行う複合語・派生語のアクセント研究のための基盤は、既に確立していたと言える。なお、朝鮮語アクセントに関する先行研究は、国内・国外共に多くあるが、複合語・派生語のアクセントを対象にしたものは、そのほとんどが基本的なアクセント規則と若干の用例の提示にとどまっており、例外的パターンを含む詳細について分析したものは、管見の限りない。

以上より本研究は、筆者が行ってきた朝鮮語諸方言のアクセント研究の成果を踏まえつつ、特に慶尚道方言・延辺朝鮮語を対象に複合語・派生語 (原則として固有語名詞) のアクセントの調査・分析を進め、そのアクセント分布に関与する諸要因について明らかにすることを旨とし、開始した。

2. 研究の目的

本研究では、現代朝鮮語方言 (特に慶尚道方言・延辺朝鮮語) と中期朝鮮語を対象に、複合語・派生語 (原則として固有語名詞) のアクセントについて調査・分析を行い、(1) 複合語・派生語アクセント付与規則とその例外について検討すること、(2) 構成要素となる単純語のアクセント変化と、複合語・派生語アクセントとの相関性について分析すること、(3) 複合語・派生語のアクセント分布、歴史的発展に関して、方言間比較を行うこと、の 3 つを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 複合語・派生語のアクセント調査実施: 現代朝鮮語方言 (慶尚道方言・延辺朝鮮語) を対象に、固有語から成る複合語・派生語のアクセント調査を実施する。各調査項目について常に、標準語辞書には記載されていない方言形や異形態があるかどうか確認しながら調査を進める。また、中期朝鮮語資料に現れる複合語・派生語のアクセントについてもデータ収集を進める。
- (2) 複合語・派生語のアクセント研究: 上記収集データを元に、分析を進める。各方言における複合語アクセント規則について、先行研究と比較しつつ確認するとともに、その適用率が、音節数・構成要素のアクセントクラス等の条件により、どの程度異なっているのか、詳細に分析を行う。更に、単純語におけるアクセント変化が、それらを構成要素とする複合語のアクセントとどのような相関性を持つのか、前部要素・後部要素に分け、検討する。
- (3) 方言間比較: 異なる方言間において、複合語・派生語アクセント付与規則と例外的パターン、中期朝鮮語以降の歴史的発展等にどのような違いが見られるか明らかにし、それらの差異が生じた原因について検討を行う。特に、(a) 各方言において、合流した (合流しつつある) アクセントクラスに違いが見られること、(b) 慶尚道方言において歴史的に左方ピッチシフトが生じたと考えられることなどが、複合語・派生語のアクセント分布にどのように作用するのか、検証する。

4. 研究成果

主要な研究成果は以下の通りである。

- (1) 現代朝鮮語方言複合語・派生語アクセント資料作成：慶尚道方言・延辺朝鮮語の固有語複合語・派生語のアクセントについて、資料収集・整理を進め、各項目について、話者ごとのアクセント、複合語・派生語各構成要素の中期朝鮮語アクセント、音節数等が一覧できる、辞書形式のファイルにまとめた。
- (2) 現代朝鮮語方言複合語・派生語アクセントに関する研究：(1) のデータに基づき、慶尚道方言・延辺朝鮮語の複合語・派生語アクセントパターンについて検討を行った。その結果、両方言の複合語・派生語のアクセント体系、アクセント付与規則等は、基本的に、先行研究で指摘されているパターンを示すが、個人差・バリエーションが大きく、一定程度の例外パターンが現れることを確認した。また、慶尚道方言・延辺朝鮮語ともに、二単位形のアクセントに、単純語アクセントとは異なる独自の音調型が現れる場合があることなどを明らかにした。更に、各話者の複合語名詞のアクセントと、それらを構成する単純語名詞のアクセントとの対応関係について検討し、単純語・複合語において、アクセント変化が必ずしも平行して生じていないこと、複合語全体の使用頻度(なじみ度)よりも、構成する単純語名詞の使用頻度が、想定される中期朝鮮語アクセントとの規則的対応率に関係していることを明らかにした。なお、延辺朝鮮語においては、複合語名詞の後部要素が、単純語に生じているアクセント変化と一致する傾向があり、前部要素はより保守的なアクセントを保持する傾向があることを見出した。
- (3) 中期朝鮮語複合語アクセント規則研究及び慶尚道方言・延辺朝鮮語の方言間比較研究：中期朝鮮語諸文献に現れた複合語アクセント資料を収集し、分析を進めた。それにより、中期朝鮮語における複合語アクセントは、原則として構成要素の基底アクセントがそのまま現れていたが、15世紀中葉においては、(1) 一音節高調アクセント型には二種類存在し(H-a型・H-b型)、これらのうちH-b型が前部要素であり、後部要素が無アクセントクラス(L/LL)である場合、及び、(2) 前部要素が一音節上昇調アクセント型(R)であり、後部要素がR型/LH型である場合に、前部要素のアクセントが低調(L)に交替することを確認した。このことには、前部要素のモーラ数と、連続するLH調の回避(R調は一音節にLH調が実現したものと見られる)が関係していると考えられる。また、これらの複合語アクセント規則は、16世紀入り次第に規則性を失い、類推的にアクセント変化を起こしていることを明らかにした。更に、これら中期朝鮮語における複合語規則を踏まえ、現代朝鮮語方言の複合語アクセントパターンを検討した結果、延辺朝鮮語の複合語アクセントは、16世紀以降に見られた複合語アクセント規則の類推変化が、より進行・拡大したものであると推定した。一方、慶尚道方言は、左方アクセントシフトによる音調変化のため、複合語アクセント規則における類推的なアクセント変化が妨げられ、全体的に前部要素のアクセント型保持というパターンが優勢になったという仮説を立てた。
- (4) 延辺朝鮮語複合語アクセントに関する、最適性理論による分析：(3)に関連して、慶尚道方言・延辺朝鮮語に見られる複合語アクセントパターンの違いは、延辺朝鮮語における、基底アクセントクラスの音韻論的解釈の曖昧性という概念により説明可能であるという、新しい視点を見出した。また、延辺朝鮮語の複合語アクセントは、それらを構成する各語の音節構造、語構造、音節量等と相関性が高いことを、統計学的に明らかにした。以上に基づき、延辺朝鮮語の複合名詞アクセントについて、複合語前部要素・後部要素を区別した制約群を用い、最適性理論に基づくシミュレーションを行った結果、延辺朝鮮語複合語のアクセント分布について、かなり正確に予測することができた。

本研究内容の一部について、2020年3月、国内学会において発表予定であったが、新型コロナウイルスの流行により学会がキャンセルとなったため、公開には至らなかった。現在、上記の研究成果をまとめた論文について、投稿する準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Chiyuki Ito	4. 巻 253
2. 論文標題 The accent and phonotactics of Middle Korean verbal stems	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 115-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chiyuki Ito	4. 巻 21-2
2. 論文標題 A Sociophonetic Study of the Ternary Laryngeal Contrast in Yanbian Korean	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 80-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Chiyuki Ito
2. 発表標題 A Sociophonetic Study of the Ternary Laryngeal Contrast in Yanbian Korean
3. 学会等名 MIT Phonology Circle
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Chiyuki Ito
<http://www.chiyukit.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	マサチューセッツ工科大学		